

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13457

研究課題名（和文）現代アフリカの国家統治：ケニアの人獣共通感染症対策を事例として

研究課題名（英文）Zoonotic Disease Control and the State Governance in Kenya in Kenya

研究代表者

楠 和樹（Kusunoki, Kazuki）

東京大学・大学院総合文化研究科・特任研究員

研究者番号：90761213

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：近年、東アフリカではエボラ出血熱、リフトバレー熱、マールブルグ病などの人獣共通感染症がたびたび流行している。人獣共通感染症とは、同一の病原体によってヒトとヒト以外の脊椎動物の双方が罹患する感染症であり、グローバルヘルスの新たな脅威として一国の範囲を越えた対策が進められている。本研究では、とくにケニアのリフトバレー熱対策を対象として、植民地期から現在までの人獣共通感染症対策がどのように変遷してきたのかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東アフリカの人獣共通感染症対策について、従来の研究では対策の有効性やそれが直面する課題などについて検討されてきた。それに対して、本研究ではアフリカ連合・動物資源局（AU-IBAR）、ケニア公文書館、ケニア農業畜産開発省資料室、大英図書館、オックスフォード大学ボドリアン図書館などの資料とフィールドワークによって収集したデータに依拠しつつ、国家統治との関連でこの対策がどのように展開してきたのかを明らかにし、新たな視点を提示した。

研究成果の概要（英文）：In recent years, zoonotic diseases such as Ebola hemorrhagic fever, Rift Valley fever, and Marburg disease have frequently spread in East Africa. Zoonotic diseases are infectious diseases that affect both humans and non-human vertebrates through the same pathogen. As a new threat to global health, measures that extend beyond the borders of individual countries are being promoted. This study focuses on the countermeasures against Rift Valley fever in Kenya, clarifying how strategies for combating zoonotic diseases have evolved from the colonial period to the present.

研究分野：アフリカ地域研究

キーワード：アフリカ国家

1. 研究開始当初の背景

アフリカではエボラ出血熱、リフトバレー熱、マールブルグ病などの人獣共通感染症がたびたび流行している。人獣共通感染症とは、同一の病原体によってヒトとヒト以外の脊椎動物の双方が罹患する感染症を指す。とくに知られているのが2014年に西アフリカのギニアで発生したエボラ出血熱のパンデミックで、多数の人々が感染、死亡した。これらの感染症はしばしば国境を越えて急速に拡大することから、感染国のみならず、グローバルヘルスを脅かす新たな課題として位置づけられ、対策が進められている。

本研究の対象であるケニアは、近年になってリフトバレー熱のアウトブレイクにたびたび直面している。リフトバレー熱とは蚊によってウイルスが媒介される人獣共通感染症の一種であり、おもに動物に感染するものの人間にも感染する。この感染症の存在自体は植民地期から知られており、当初はケニアのリフトバレー地方でたびたび小規模に流行する風土病の扱いを受けていた。しかし、近年は交通網の発達や移動の活性化とともにその範囲を拡大しており、グローバルなバイオセキュリティの脅威のひとつとして位置づけなおされ、急速に対策が進んでいる。この転換がどのように進んでおり、それが国家統治の浸透とどのようにかかわっているのかを明らかにする作業が必要となっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、とくにケニアのリフトバレー熱対策を対象としつつ、アフリカにおける人獣共通感染症対策が国家統治との関連で植民地期から現在までどのように変遷してきたのかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究の方法としては、二つに大別される。まず、人獣共通感染症対策の植民地期以降の変遷を明らかにするために、史料調査をおこなった。具体的には、イギリスの国立公文書館、大英図書館、オックスフォード大学ボドリアン図書館、アフリカ連合・動物資源局(AU-IBAR)、ケニア公文書館、ケニア農業畜産開発省資料室で史料を収集、分析した。また、対策の具体的な実践について理解を深めるために、牧畜民マサイが住民の大半を占めるケニア南部のカジアド郡において現地調査を実施した。

前者の調査については、リフトバレー熱に取り組む体制が形成される過程を再構築することを試みた。ケニアの獣医行政はもともと入植白人が所有する家畜の保護と改良を目的として始まったもので、戦間期以降は変化が見られたものの、植民地期を通じてアフリカ人の居住地域に配分されるリソースは限られていた。第二次世界大戦後のイギリスの植民地政策の転換はこの点で重要な分水嶺であり、獣医行政の組織化と拡充が進められ、開発計画におけるその役割が強調された。しかし、リフトバレー熱は牛疫やトリパノソーマ症などの動物感染症と比較して頻度も経済的な損失も深刻ではなく、流行の範囲も限られていたことから、この時期になっても科学的研究や積極的な対策の対象に含まれなかった。他方で、第二次世界大戦後とはIBED(アフリカ動物感染症局;現在のアフリカ連合・動物資源局)を中心に動物感染症に対する国際的な技術援助の枠組みが整備されはじめた時期でもあった。そして、この枠組みはのちにリフトバレー熱を動物だけでなく人間の健康にとってもリスクとして認識し、グローバルヘルスの課題として取り組んでいく体制の下地を用意することになった。

後者については、ケニアとタンザニアが国境を接する街ナマンガ市において2019年6月に実施された、フィールド・シミュレーション・エクササイズについて聞き取り調査をおこなった。一般的に人獣共通感染症に感染するリスクを減らすためには、ウイルスを媒介する蚊を制御したり、衛生的な環境で家畜を屠殺したり、生乳や肉など家畜の生産物を食べる前に熱処理したりすることが求められており、その対策のひとつとして行動変容を促すキャンペーン活動が実施される。このエクササイズもそのひとつであり、リフトバレー熱の将来的な流行に備えた事前準備の体制や情報収集のシステムを構築することを目的としていた。このエクササイズの実施主体は東アフリカ共同体事務局(EAC)だったが、世界保健機関(WHO)、アメリカ国防脅威削減局(DTRA)の生物学的脅威低減プログラム(BTRP)、ドイツ国際協力公社(GIZ)の支援を受けており、その専門家が同行していた。このことは、この問題が今や一地域の風土病などではなくグローバルなバイオセキュリティを脅かす潜在的なリスクとして捉えられていることを示している。また、エクササイズを受けた地域住民や屠畜場の職員にも聞き取り調査をおこない、そのようなリスクについて大きな温度差があることも明らかになった。

4. 研究成果

本研究の成果としては、2本の査読付き論文を発表することができた。具体的には東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が発行する『アジア・アフリカ言語文化研究』に掲載された「境界線をめぐる政治と辺境統治性 植民地期のケニア北東部におけるソマリの事例」(106号、19-66頁)と、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科が発行する『アジア・ア

リカ地域研究』に掲載された「ラクダとブローカー ケニア北東部のラクダ市場におけるディラールの実践」(23 巻 2 号、277-292 頁)である。また、『TINDOWS (環インド洋地域研究プロジェクト・東京大学拠点) ワーキングペーパー』として、「植民地科学者としてのアーノルド・リース-ラクダ調査、反ユダヤ主義、極右思想」(1-18 頁)を発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 楠和樹, 佐藤裕視, 角正美, 平山草太, 溝内克之	4. 巻 100
2. 論文標題 書評 Emma Hunter著『Political Thought and the Public Sphere in Tanzania : Freedom, Democracy and Citizenship in the Era of Decolonization』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 132-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 楠和樹	4. 巻 2
2. 論文標題 植民地科学者としてのアーノルド・リース ラクダ調査、反ユダヤ主義、極右思想	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 TINDOWSワーキングペーパー	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 楠和樹	4. 巻 106
2. 論文標題 境界線をめぐる政治と辺境統治性 植民地期のケニア北東部におけるソマリの事例	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ言語文化研究	6. 最初と最後の頁 19-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57275/ilcaajaas.2023.106_19	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 楠和樹	4. 巻 23-2
2. 論文標題 ラクダとブローカー ケニア北東部のラクダ市場におけるディラールの実践	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ地域研究	6. 最初と最後の頁 277-292
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 楠和樹
2. 発表標題 ケニア内陸部から見た環インド洋世界
3. 学会等名 環インド洋地域研究プログラム 若手研究者集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 楠和樹
2. 発表標題 間接統治を捉えなおす 辺境統治性の視点
3. 学会等名 第3回「アフリカ国家論の再構築」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 楠和樹
2. 発表標題 「ラクダの民」の社会・生態史 植民地期ケニアにおけるアウリハン・ソマリ社会の生業、移動性、境界
3. 学会等名 科学研究費基盤研究B「牧畜社会におけるエスニシティとエコロジーの相関」第8回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 楠和樹
2. 発表標題 サバンナを統治する - ケニア乾燥地域における権力の系譜学
3. 学会等名 京都大学アフリカ地域研究資料センター第251回地域研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 楠和樹
2. 発表標題 植民地期ケニア北東部におけるモビリティ、境界線、領域性
3. 学会等名 日本アフリカ学会第58学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 楠和樹
2. 発表標題 著書解題 『アフリカ・サバンナの 現在史 人類学がみたケニア牧畜民の統治と抵抗の系譜』
3. 学会等名 まるはち人類学研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuki Kusunoki
2. 発表標題 Thorn-scrub Barren, Dromedaries, and Colonial Rule in Northeastern Kenya
3. 学会等名 CAS/HYI Fellows Colloquium at Harvard University
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 シンジルト、地田 徹朗	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋外国語大学出版会	5. 総ページ数 250
3. 書名 牧畜を人文学する	

1. 著者名 マフムード・マムダニ（楠和樹訳）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 10
3. 書名 アフリカ・大学・植民地主義、『世界』2019年9月号	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------